972

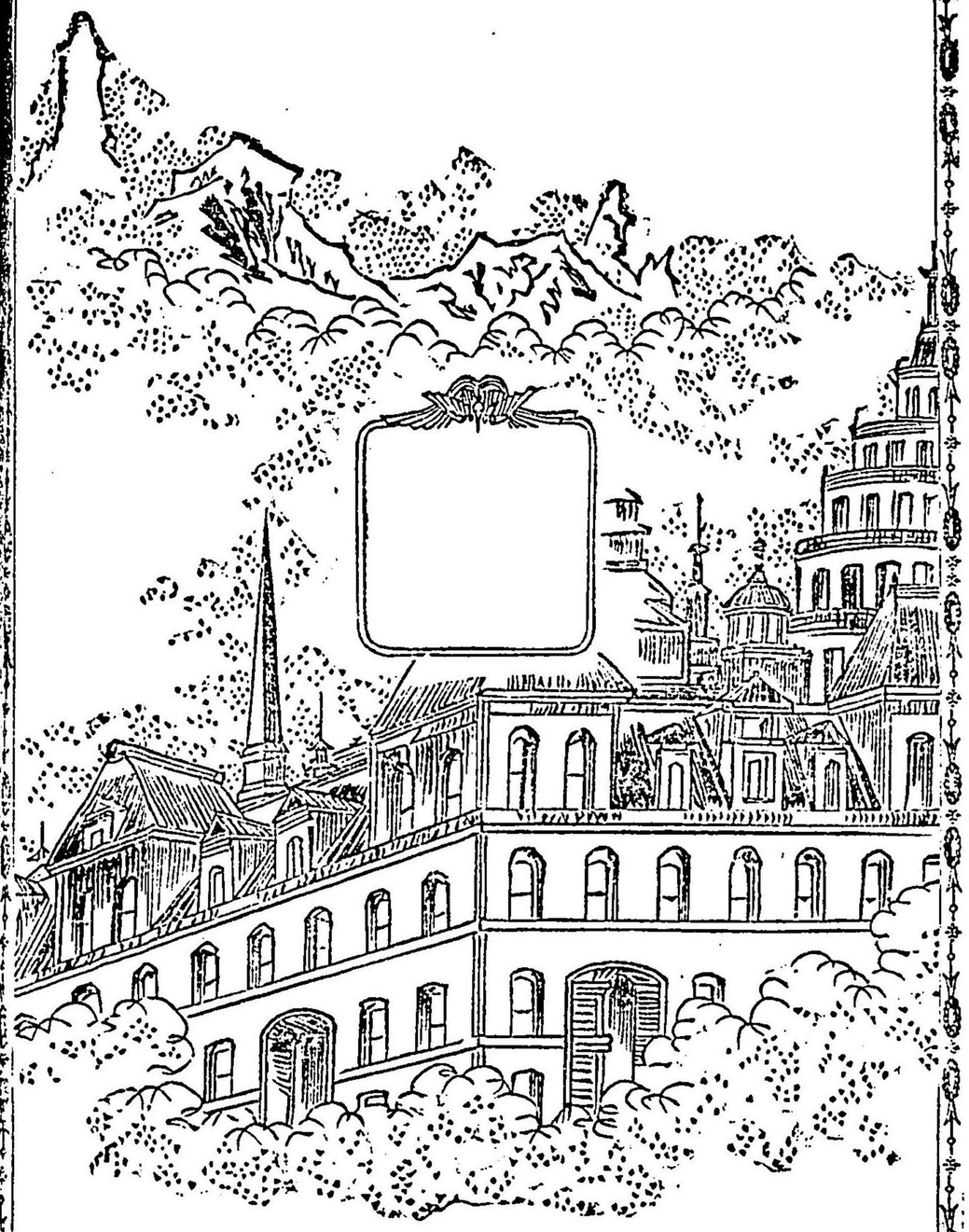
眞書 釋迦八相倭文庫第六編の序
重訂

釋氏か説法の根據とする天道地獄の方便を巨細ゝ解釋なす時ゝ到底衆生を濟度なすため假ゝ設けゝ虚誕の巨擘併し箇樣の誕ふらゝ如何程吐くも悪くゝあらねと近來頻ゝ流行する夥多の小説綺語中ゝゝ只管婦女子の歡を買んと殊更ゝ猥褻の文辭を併べ或ゝ根もなき事を綴りて無學者流を瞞着し我一人得たりとする放呆た作者いと多かり然るゝ本編の原著者ゝ釋氏の方便を取次て此小説を編たるものゝら迂生ゝ又夫を取次きかゝを漢字ゝ書換て眞實らしき虚誕ゝ吐けと決ゝて世教風俗ゝ害なきのみゝ幾分か婦女子童幼の迷の夢を覺す功德の有や無や开ゝ看容の取捨ゝ任せ迂生ゝ毫も存し不申候

繪入自由新聞の鋏砲記者　渡邊義方記

阿羅羅仙人
神童子
悉達太子檀特山ニ登リ阿羅々仙人ト師トシ
寶冠衣服ヲ車匿ニ持セ
王宮ヘ遺物ヲ送リ
舍人車匿

跋迦仙人
悉達太子



眞書
重訂釋迦八相倭文庫上編上之卷

東都　萬亭應賀原著
花笠文京重訂

第十一回

去る程に悪達太子ハ既に煩悩の羈絆を断つて耶輸多羅女を振りすてゝまひ金蹄の駒に打ち跨うり舎人車匿を従がへつゝ檀特山へと志ざせーに素より諸神諸菩薩の結縁あれゞ四天王の神達駒の前後を守りつゝ一夜の中に一千三百余里を超え寂寞たる高山に登りゑゞーー佇立て甲首乙首を打ち眺めて曰まふやう如何に車匿慥に聞け此の霊山を眺むるに雲青黛の谷と埋め嵩々とーて心耳を澄せり爰に於つふ〳〵と故郷の事を思ひそるに十善の位も夢の榮華千花万花ハ眼前の塵埃、愛惜妄念ハ煩燃の薪ハ無冥の猛火に焼れんといと怨めしと語りたまへと車匿ハ側に夢見し心地せふれ是まで來りー道程を不思議と思ひ煩ふのを稍おりて駒の口を探り開きせたまへと先に立ち猶ほ奥深く登りーごの谷の傍らに一人の仙人坐禪を組みて太子の來るを待ち設ゞたる樣子なりーゞ屹と疾視へ誰可るやう、イヤ待て其處なる胡亂奴無道放逸の姿あて何處より迷ひ來ーぞ此峰

靈い音よも聞かん俗體凡夫の穢れし身よて登り來べき處ろよあらじ汗も三尊別敎の靈山よて八恩八智の聲聞い四諦十六行相を習ひ四門通行の道よく獲心十地の圓覺い三世別敎を學び又た十二因緣を悟りて因位果位三昧を行なひ諸々の佛達四智圓滿六波羅蜜の戒行と勤め清淨堅

固よ三摩耶敎の靈場なるよ何を以てかゝる不淨の姿よて馬よ鞭ち是まで登り來たるぞ此の先へい一寸ども叶ふまじ急ぎ山麓へ歸るべーと活と眼を開きつゝ止むる詞の下よりも太子い小鹿と屈めたまひ車匿を退らせ敬まいて、アラ恥かしや面目おや斯る靈山とも辨まへず不淨放逸の姿よて登りし罪い免されよ斯く中と我ところい伽比羅城の主個さる淨飯

玉の一子よて悉達太子と申そもの發心正覺の道を研めんさめ十善の王位を振り捨く妻子を見限り來りたり何とぞ無上菩提の清淨なる檀特山の寶嶺へ赴むく道を敎へたまへと云い件の仙人い稍や色を直しつゝ。ハテ姿形の弱體ある見掛よらぬ志ざしの崩闕て殊勝らーさ夫よ免じて其道ぞかりもいざや敎へて取らそべし抑ろも檀特山の寶嶺へい是より四十里計登りー處よ上空靈と云ふ翠あり其東よ當りて白雲山麓に柵引て金光明の輝やく方ころ汝が尋ぬる寶嶺なれ偖道い敎ゆるものゝ其淺猿ーさ凡体よて登ると難けをい是より思ひ諦らめて立ち戻るゞ優あるとと語れゞ太子い尙は敬まひ。アラ辱けなきおん諭言假令汚れし凡体なりとも心い清き瀧津瀬よて尙ば身と清めて登りゆ玉發心を遂ぐべきあり偖まさおん身い如何ある人ぞ問まはしゝと問掛れゞ。去ゞあり我こそい此山の半腹よ行爲そまを跋迦仙といふものあれ左あふゞ勝手よ登るべーと道を敎へて通しゝる太子いほと〳〵歡びたまひ車匿よ金蹄を引寄させ遙よ登りさまへども痛いしや素よりして天子の若宮と冊づりを假初よも道面を踏せたまひーといあきよ巍々峨々と聳へさる山又山の嶮岨き道と辿りたまへい御足疲をて石よ躓き爪をさがし鮮血流れて裾を裂れその糸屑い御足の鮮血よ染まて唐紅ひ草の葉色も時あらず紅葉よーゝる如くあて眼も當られぬおん有樣されど涙を拭ひてい跡ふり返り〳〵車匿を請め屬まーそやう〳〵よ二十里余登りたせふよ一個の童子花籠携さへ徐々山を降り來て惱みたまふ太子を見やり。箇い不審や汝等い何處如何なる處よりして此靈山へ登り來ーぞ急ぎ山麓へ降るべー辱けあくも此山い七佛出世の前よりも顯密二種の靈地よて牛馬い勿論凡俗の通ひ來べき所よあらず北い雪山の峯つゝき南い摩迦陀淨嶺よ並び峯よい滔々として清らかある三筋の瀧の音ゝみて夜い無明の夢もあーー山麓よ流水澄み澄り二筋よ滿々たり又た谷川ふい青蓮花四つの時絶へを花咲き峯を過れい八正道の門ありて三心具足せざるものい登ると叶ひざたー急ぎ山麓へ降られよと靡爽快ふ制めける太子い衾よ一つの闕を踏ゐ今ま又た一つの難所よ出逢ひぬ去れと箇い昔ある學びの道よて却つて我身の印証あらん問て見ぞやと恭々ーく。箇い〳〵尊とき敎へかあ我いその三心を極究正覺を遂んさめよこそ檀特山の寶嶺へ志ざそものなれば何とぞ阿羅々仙人の庵室まて道案内して賜いるやう偏よ願ひ參らそるありと身を謙遜て曰まへは童子い莞爾と打ち笑みたまひ。イザさらい我が踵よ付てと進みゆく跡ふ從ゞひ尙ほ山深く疲れし足を踏みしめゝ岩根傳ふて登りたまへいといい嶮岨の峯よ出で樹木深々と茂繁り谷底深く皓々として何よ比へん方もあく山麓よ白雲柵引て峯よい金光輝やきけれゞ是れぞ問ーふ遊なき檀特山の寶嶺よやと童

子の袖を引きとめて尋ねさまへバ如何よも然ずと云ふよ思いず手と合せ餘りの嬉しさよ勇み立ち血よ染み腦む御足を踏あらしつゝ草臥も忘れたまふぞ道理ある偖此翠の半腹頃一業殺る褐立の中いと清らかある庵室あり門邊にハ發心門と梵字を以て記したる建石も苔蒸して年經る有樣物寂さり件の童子が門内へ入るを見たまひ悉達太子ハ車匿よ金蹄を外ゐ驟かせ引きつゝいておづ〳〵と這入て暫し佇立たまへバ阿羅々仙人金剛杖と杖き立てとどろよ髮を紊しつゝ雪れ眉より眼を瞋らし杖をかき撫で出で來り太子と車匿を活と疾視つけ。ヤア夫ある大惡人彼ある人非人何處より迷ひ來しぞ急ぎ山麓へ下らずハ此金剛杖よて打ち据んと怒るとゑバしと押宥め太子ハやとら跪坐き我ハ摩迦陀國迦毘羅城の生個淨飯大王の一子ある悉達太子と云もれあり發心放捨の大願を遂んぐさめよ慾を離れ十善の王位を振り捨て親族と見限りて此までもるゝ來りしものを大惡人の人非人のとハ餘り以てお情あしと怨ぎる詞を聞もれいらず。ヤア默れ凡人大惡人とハまだ思五逆十惡の罪人あるを尙ほ悟らずやと大音ゐ叱り付ふれ太子ハ耐へず。イヤ在下ハ幼稚あき頃より して禽獸昆蟲云ハ更ありおよそ生とし生るものを殺しさると曾てゐ況んや人間を苦しめしとゐし然るを五逆十惡とハと宣まへバ猶ほ怒りて。ハテ口賢てき凡夫かあ其處ゐ居る人非人ハ暫らく

去れと車匿と門外へ立ち去らせ。さらハ具よ其所以を語り聞さん能く聞ね先づ大惡人の標よハ汝ハろの初め母の腹を三年苦しめ遂よは其命を取り尙ほ恩愛深き父の命よ背きて十善の位よ即かず乳母を始め三人の后及び月卿雲客夥多の官女の歎きを思ハず無下よ振捨て又ハ宮中を忍び出て汝を守る役人へ落度を拵らへ其罪跡大方ならず汗ハ右も左も父の恩ハ天より高く山よ形とり母の恩ハ地よりも深く海よ形とれり爾あごゐふゐこの恩を報せざるの罪科ハ太千世界の土の如し然るを爪の垢程の善根を植さりとも爭でか望の通ふべき急ぎ山麓へ下れよと敎へ諭され悉達太子ハ其胸板へ五寸釘と打るゝ如く彳亦々と思ひ當るとのみあれバ世よは不思議の仙人もあるのもなる是あらでハ我ゐの師と頼むゐ足らずと其袂よ取り縋り。ハ、今の仰を聞き奉まつりてハ凡ろ天地廣しと雖ども此身一つの置所よ立ち迷ひ待るかし何とぞ慈悲と思しめし爰ゐ止めおき朝夕の給仕ふゐと召し使とれ發心放捨得達の敎を聞かバ是までの罪も少しハ消ゆべきこの修業よ罪障消滅せバ水行斷食夫ハ物かハ假令命を取ゑ行とても少しも厭ゐハべらしと宣まふ詞よ仙人ハ少し怒の色を和らけ。ホ、如何よも汝ゲ云ふ如く懺悔滅罪をる時ハ斯る五逆十惡も速やかよ滅それバ只ゞ發心修業てゑ肝要あれと思へらしと聞くより太子ハ雀躍して。アラ嬉しや喜ゑしや宜ハ事を聞つるゞ難

行苦行よ心魂を碎き假令萬劫經るとても修業怠たり申そまじ偏よ願みまゐらすると十善の君さるる太子の身よて枯木の樣ある仙人の足を戴さき禮拜それゞ今い仙人も眞意を見屈々漸やく詞を和ふげて。チヽ微妙くも言けり去あがら我ご道い其姿ゐてい學ひがたし。シテ其仔細い。さをい汝ごの衣服を見よ夥多れ蠶と煮殺して糸よ取りつゝ綾錦をあやなーさるを又さ草木を枯ーつる其汁よて いろ〳〵れ浮世れ色よ染めゐーさる紅は火宅の火よ形どり煩惱心の炎とゐて發心放捨の邪魔とある黄色い娑婆の執着よて親子の枷や哀別離苦嘆き悲ーむ涙の色偽又さ青きい仮の世れ老少不定を身ゐ抱く病死に苦しむ衰ふふ色さきゞ白きより墨染の黒き衣に隈れども夫そら心得なきもれい浮と着るい叶ふまド右よも左よも蠶を殺し草木を枯し盡ーて造さる衣い殺生の罪掛れゞ急き仙家の草衣を取り寄せ煩惱の垢付きし其の汚れたる衣服と脱き捨く伴ゐひ來りー人非人に持せて故郷へ返そべし爾なくゞ得達難々れゞ肌を清めし其上よく師弟の契約をゐそべーと言捨く杖を突き立奥の戸帳へ入よげる太子い未ざ仙家れ草衣と云ふものを御存ドゐ々れゞ心を痛ゑ是れゐ々をゞ得達の叶いぬとかと最と愛いし氣よ庵ー室の内へ入つ〳〵大音ゐ奥へ向つて曰まふやふ。アラ惜ゐや如何よせん西も東も分ぬ身のゐんで仙家の草衣とやらんーるべき筈のあきものを左まで强情くせ

さもあれ何處の果よ有るものか所在を敎ゑ給いれかー草衣いつこ如何あるものぞ聞まほーやと幾回の訪なふ聲の通トてゐ遥の奥よて。その草衣是れよ在りと答へて俄然よ音樂聞ゑ名香薫して一室の内より颯と扉を押ー開て現いれ出たる一個の手弱女姿いゐまめく裾衣の重ねー褄い七重八重梅の咲へい柳の招く春い苦海の色見ずいつぞや値遇ゑし玉ひー淫肆の花街の破種美多寶い普賢菩薩よく四下目眩く輝やかせ太子の側へ運ひ出で。善哉〳〵悉達太子諸佛の結緣空ーくせ能くもいつぞや哲ひし如く妻子王位を振り捨しぞ之よ携さへ持ち出ーい淨居天より汝よ與ふ仙家の草衣と云ふものなり急ぎ是よて肌を掩し其汚れたる衣服をゞ人非人よ齎らーて早く王宮へ返そへーと草の葉にて綴りたる衣を遞與したまふより太子い受取り押ー戴さきやをら衣服と召ー變へたまひゐん小刀を逆手よ持ち玉の錨頭の髻を弗つと切りて差出ーたまへゞ普賢菩薩い受け取く秘文を唱ふる折ゐらよ眼前よ紫雲棚引き天津乙女ごの舞樂と奏ー秘曲の袖い春風よ最も長閑く舞ひ列ぬ鼓の拍子琴の音い松風と共よ鳴ゑわさり簫篥笛い伽陵頻迦の聲に擬ひて美いーく太子の出家を俱養ーて天の羽衣を翻がへし天津天涯へ登り々る斯て太子い脱ぎ捨てたまひし御衣を携さへ戸外へ出で亜匿を招々ご太子の姿今の間よ變り果くたる御有樣よ驚ろき呆れて茫然さりしゞ稍ありて御側

へ招り寄り。箇ゝ汗も如何あろゞせしぞ其の御姿ゝ何ぞやと尋ね申せゞ莞爾と打ち笑み。されゞ懇ろくゝ尤ともおれど此の姿ゝ豫々の大願達せー標おり偖て此れ衣服品々を携へて是より汝ゝ都府へ歸り父上ゝ差しあげて不孝れ罪を詫びてくれよ又た耶輸多羅女へ言傳んゝ我が事ゝ思ひ諦ら給へ父上ゝ能く仕へよと傳へてくれと有繋にも是まで積る思愛れ妹背の間ゝ斷るとても斷られぬ姫が事何ぞ思ひやらせさまふかや止むとそれど忍ひうねおろくゝ涙ゝおん聲も曇れゝ車匿も耐へうね涙おのらゝ。これゝ又さ思ひよらざる仰せ言を聞くものかおぞ暫しの御遊のおん時ゝも下臣御側を放れーとおく昨日までも綾錦ゝ起臥ゑたまん夥多の女御ゝ册づのれ透波る風も防ぐてふ九重の奥の玉殿ゝ打て變りし岩の上刃の如き雪下ーを草もて綴りー御單衣ゝておん身もいかで堪るへき此山中ゝ捨てれきて返りー跡ゝて何者この十善天子の若宮と册づくとのあるべきが直ゝも獸の餌食ゝおらん事を變ての仰せ事如何なるとを曰まふとも下臣此處ゝ立ち去らじいつくくまくも附添ておん宮仕へ仕まつると願を掉て不得心太子ゝ倦めと忠の道されど斯てゝ我ごの修業の邪魔とおるものおれゝ如何ゝせんと甲首乙首を思ひやまて稍やしゞし茫然として居さまひしが再たび車匿ゝ曰まふやう。イヤ車匿これまでの其許が心配ひたとふる物ゝさ喜悅ゞや去ながら我が云ふ事を能く聞ね夫れ娑婆世界ゝそれくゝゝ榮華の程を樂しめど四顚倒の忠を脫れ只だ目前の境界ゝ迷ひ來世を知らぬものおらゞ翼なくとも鳥ゝ等ーく四足おらぬも獸ゝ齊ー汝知らぬや魔界の者共惡劫の兵物引き連を輪廻の城ゝ立て籠ゞ苦患の狼烟ゝ合圖して煩惱の松明振り立て瞋恚の鎗尖ゝ愛著の矢尻を揃へて曳々々と浮世ゝ迷ふ凡夫の体を責め惱まと此の大敵を速やかゝ打ち亡ぼーて一切衆生と救ひ取り大悲の船ゝうち乘せて慈悲の棹を取らぬゝ流轉の波はよも踰さー爾れゝ一人で生れ來て一人で歸る習ひゝ死出の山路ゝ偖如何ゝ親ーき友も從ごゞず土となり灰とおゞ無常れ別れを如何ゝせん悲れ正覺ざゝ遂けたれゝ汝を譜代の友とおし必らす安樂ゝ扶助し取らせん此處の道理と聞分て疾々都府へ歸るべしと道理責て曰まへゝ車匿ゝ左ろと思へどもさしもゝ別れの惜まれて。ハヽ仰せ逐一畏こまをど下臣宮中へ立歸らゞ帝罪を許ーたまとど命と召さるゝゝ必定おり歸りて憂目を見んよりも爰で果るご優ゝこそ我が亡き跡ゝ右も左も望を適へたまふべーと悲嘆の涙ゝ暮々るを太子ゝ押し止め。イヤくゝ夫ゝ僻事おり何とて帝が汝の罪を糾ーたまふ仔細あるべき却つて褒美したまへゝ急ぎ遺念を携さへて戻りくれよと押し返ー曰まひゞれゝ是非もなく繋ぎし駒の綱を解きおん遺念の品々を鞍ゝ結ひ付け牽き出せゞ太子ゝ駒の轡を取りて。ア、如

何よも憫然おい此の駒なり年月永く馴みつゝ此程とても從ごへゞ汝い法の道案内鞭うたをし跡さへも一佛場の緣ぞのし未來い救ひ取らそるぞと別れの詞を告たまへゞ金蹄い黄なる涙と流しつゝんとも哀れよ嘶なきつ太子の御顔と眺めたり車匿い耐へ兼太子よ縋ぎて。喃是れを見たまふべー畜類でさへ此の如く別れを惜み泣き叫ぶ況てや下郎ぐ胸の内察しさまへと搔き口説く太子もさーもよ耐へこの孫前後を忘れ悲しみつゝ去ゞー佇立み居たまひーが稍やくよ氣を取り直し。ァゝ思い出も不覺の涙漫よ心と迷いせり哀別離苦い世の習ひ名殘い尽じさらでやと只ざ言ひ捨て門の内跡をも見すして入りさまふ心の中や如何おぶん想像ふれて哀れあり車匿は是非おく涙を拭ひ金蹄をひき立て跡振り返ぎ〳〵檀特山の寶嶺を本意おくも下る程よ辛き思ひい山〳〵の花を見捨て雁金のふみも及ゞぬ峯つゝき甲斐おき駒の諸あぶみ夢路を辿る思ーて都府の天へ立ち歸る涙を凌ぐ袖笠に短りき袂を絞りゝる案下休題迦毘羅城の新御所い太子出させたまひたる其翌朝とありけれゞ侍女共いあまりゐ遲きおん目覺と錦の扉ゐきひらき覗ひ見れゞ箇い什麼よ太子い勿論お泊りの姫も在さぎ御床よい只だ御枕のみおれゞ忙て噪ぎつ色を變へ甲首よ乙首よと尋ぬれど皆暮姿の見にさまゐぬい優陁夷の女房命婦まで告々知らそれゞ皆諸共ゐ打ち驚ろき夫い如何おるたん事やと取る物も取りあへず走り來りて間毎を尋ね妻戸の陰まで改たゆさせしよ更よお行衛ぢれざれば夫優陁夷へ忙ただしく此由斯と知らそれゞ優陁夷い肝を冷しつゝ开い一大事と刀むつ取り御庭口より立ち出て十二の大門三十二の中門小門を詮議せんと先つ手近おる所へ馳せ付ゆ警固の有司撿非違使等衛士を呼び出ー尋ぬれど銘々周章狼狽つゝ土よ平伏し詞を揃へ。箇い怪しかるれん事おり是おゐ御門い斯の如く貫木固め閉ぢきりて夜い篝火を輝やかー怠たりおく守りーゆゑ是より忍び出たまふとおどい思ひもよふぎ外々を詮議おれかしと演れゞ優陁夷い倘ほ急き立ち。さふゞ汝等手分して早くおん行衛を尋ぬべし急げ〳〵と吩咐て其の身も直と其足にて北の御門へ馳せ行きけるさて輿向よてい暗き夜よ燈火消し如くよて優陁夷の女房兩御所の女中と急ぎ廣座敷へ委皆く呼ひ出し太子のお行衛問ひ糺せゞ其座よ列おる女中們銘々よ身と脱れんと中よも四五人口を揃へ。手前共い昨晩のお夜詰の當番おらず部屋よ臥りとべりしゆゑ其儀い夢ゐも存ー申さぎ此の趣むきい昨晩のお伽の者よ尋ねたまいゞ委しく分り申ゞべーと現よ道理おる辨解よ優陁夷の女房い夫よりー夜前の非番の女中どもい殘らず部屋〳〵へ返ーつゝ昨晩お伽の當番をのみ遺し止ゆていと緊ーく問ひ尋ぬれど諸共よたゞ當惑の外いおく差ー俯むきて泣ぐみ答おゝれゞ詞を正し。如何ゐ皆の

衆能く聞かしやれ前以てあれ程よ緊ーき仰せを蒙むりて通夜ーくお伽を勤めあげふ太子のお行衛えらぬといふ不所存あとゝよもあふトサア有様を聞きませう如何よ〳〵と問ひ詰れど尚や一人として答辨もおく只ざ女鼠〳〵と泣くのみあれゞ女房ゝいとど聲あふ〳〵げ。偖言甲斐なき人々かなシテ其許達ゝ昨宵よ限り何を迂濶ーて居たぞお伽しながふ太子の外出知らぬゝ何ぞ其許衆よ仔細がおくてゝ叶とぬと夫を包まず言ゑやれと問とれてやうやく年輩なる侍女前へ進み出で目を拭ひつ〳〵答ふるやう。如何よも太切おお伽の番よて太子の外出を知ふぬと云ふ疎忽お私くー共如何なるお咎め蒙むるとも詮方もおき身の落度恐れ入りたる次第こそ偖お尋ねよ任せまーて昨晩の有様を有のま〳〵お聞ねはべらん即はち此處よ居合せ皆お昨晩の番直よて甲夜より詰て例の通り浮世の噂何や彼の物語おど致しつ〳〵睡氣を覺ーて居たべりしよ子の刻過とも覺しきころ話ーも途切れ火鉢の火も消ね灯火さへも眠るやうお何とおく寂寞くあれゞ思ゝずも一人居眠り二人居眠り丑寅の刻限よもあれば頻よ睡魔さー來りて私くしまでもとろ〳〵と火鉢よ腕をかり枕籌るともおく現ともなく少しの間を過きけるがた火の番の聲よ驚ろき夫より夜明よ至るまで怠慢ゝ恥かりーと一人ごの熱き皮切の口を濟せば居あらぶ女中最前よりーて口無の色青ざめて居たりーぞ我も〳〵と顔を上げ。只今此方の云れし如く皆恥同様よ在それゝ御前宜しくお執成ひとへお賴みまゐらそると皆お其眞實を吐きゝれゞ優陀夷の女房打ち點頭き。さらゞいよ〳〵其詞ふ偽りなくゝ此趣き帝と始め橋曇彌のおん耳よも入らぬ先太子を尋ね穩便よ濟さでゝ叶ふまじ左おくゝ御兩方のお嘆き殊よ昨夜當番の表奥の者共ど痛くれ咎め蒙むるべけれゞ何率早く太子樣を見出しまゐらせ極秘密よて濟せたしと下を憐れむ發明ゝ流石よ優陀夷大臣のれ配婦ぞと皆な感じて其ま〳〵下らんとしたる折から何ぞや軍士の事よ付き役換ーたる老女の南花女腹よ逸物悪計を隱して態と忠臣顔威儼ぐまーく襠衣さゞき立出おごら聲荒らりよ。イヤ優陀夷どのゝ御内實箇程の大事を内々とゝソリヤ何としゝ計らひぞ最早我より橋曇彌樣へ具さよ聞へ上けたれゞ隱しゝおらぬ表向イヤ何よ其處お女中達ゝ昨晩のお夜伽の勤めしおぐふ太子のお行衛しらぬとゝ此南花ゝ聞捨おらぬ是ゝら私ど詮義の役目サア有樣を包まず云やれと打て變つた茨木のとぐ〳〵しくも問掛る皆お〳〵顔を見合せて何の回答もおきものゝら南花女ゝ焦立ちて。サア何ドやいのコレ皆の衆私よゞのり口利せ何故よ返辞とゑやふぬぞコレ其口ゝ物喰へたり冗口を利くゞつりど能てゝホンにあるまいぞやサヽ誰どのでも其仔細を早く言ぬか口ど利けぬウイヤゝや是ゝ呆れた人達藥人形の木像おら最ともと思ひ

もそれぞ誰方も〳〵口まめで日來い喃々喋々人の噂鼻唄さへも止む間いあいよ今日いどふして啞の樣よ温和くあらしやんしたと惡口交りゐ恥ぢーめられて年輩ある以前の女中腹立しくも詮方あさゐ進を出で手と支へ。成程私し共と昨晩れ當直よて此上もあき不調法太子樣のおん行衛知つてをりまそとあらゞ何とく包み隱ーませう只今も有の儘よ優陀夷どの〳〵御内室へお告げ申せし如くよて外に云ふべきといあく只だ此上い如何なる罪よ行那いる〳〵とも仕方もあく知ふぬ事い申されませぬ昨夜お伽の姫達に若宮樣のお行衛を尋ねたまいゞ知れべきりと怖々として逃々をゞ流石の南花も眉を顰め。そんあら何でも其許衆い知らぬとあらい知らぬよせよ憂目で云そる工夫もあれど开い先づ措きて三人の姫達を詮議せん其許衆も今日い免を程よ事の濟むまで部屋々々よ屹度慎しみ差扣へ重ねての御沙汰をい神妙よ待ちやれよと吩咐るを聞きかねて優陀夷の女房側より。イヤ先づお待ちあれ南花どの夫はど嚴しく仰せをとも宜ーからんと存ドまそと言せも果を南花女か。ハテいつもい私の上よ立つ此方さんあれど此義よ就てい最前橋曇彌のおん方より手前よさよ計らへと仰を受しとなをゞ右も左も先づ此方さんい差扣へて宜ろうゞ其仔細い常々ゝら能く太子ゐ氣を注よと帝を始め橋曇彌の方の仰を受て居ゐがら夫婦の衆の疎忽もゐ斯る騷動の出來たれい夫い〳〵橋曇彌の方殊の外あるお立腹と聞て女房い胸よ釘偖いいよ〳〵橋曇彌の方へ告たる事ゝ殘念や定めて南花い常々から我々夫婦を妬むがゆゑよ有る事無い事口任せゐ披露ーさるよ相違あし右も左も先つ橋曇彌の仰せとあれゞ是非もあーと口を噤みて扣ゆれゞ南花い重ねて彼方を見遣り。サア今云聞せー如く最早表向となりたれゞ優陀夷どの夫婦の衆の詞ちひでい濟ぬ事萬事今度の扱かひい此南花ご詞らへを日來私しを指さして誹り憎んゞ其報酬よどんお愛目を見やうやら皆の衆屹と覺悟して部屋よ籠りて必らずとも鼻唄や高聲い能く謹ーんて居さつたやれ太子を落せし其科よて押付け酷い其お顏ゞ思ひやられてお氣もじや情深い此南花も嬉し涙ごこぼれまそと嬉りながらよ皆々と下て己れも起上り奥を投て入ふんとそるを優陀夷の女房袖引き止め。イヤ暫らく待てもふひませう年月永く堪へしが今と云ふ今ま南花どのよチト尋ねたい事のゐり過し年の事おりしゞ好陽夫人よお手ゞ附き懷孕とおりたまひしゆゑ波利娑那殿へ忍ぜせおき橋曇彌の御前を包み隱して置たるも恐れ多き事おごら橋曇彌さまい豫てより嫉妬深き方なれゞ若ー好陽よふ手ごの附き身重の由を聞きたまとゞ又もや妬みて折角の夫人のふ腹の御子をゞ闇のゝ闇へやるやうお咒咀事おどおきやうよ責て若宮の三歳までも必ふを知らそお沙汰そおと帝よりも仰あり是れと道理と

命婦とも談合の上包み隠し絶て沙汰をバせざりしゑ如何なる事か夜叉軍士の口よりして不圖く顯れたるも是非なけれど其時其詐い局役ゑて我等夫婦れ身の上を種々悪く捨ふへて有る事無ん事言立てゝ其詐い夫が手柄ゑなり老女役ゑ出世ーて此方等夫婦命婦まで橋曇彌れゑ怨を受々て御前も首尾わるく其上帝ゑまで御不興を蒙むりーゞ漸々夫と詫び奉まつゞ御機嫌い直りたれど夫よりーてい何かゑ付け其詐ゞ口善悪なく由なき事を奏問そる由人傳ゑ聞たれと是までじつと辛抱ーて其詐ゑ向ひ少しでも怨そゞまーき事とてい云で過ーゞ仇となり此度の事も又たなん一大事ゑい侍れど之を帝橋曇彌のおん耳ゑ入れまつゝい嘸や嘆かせたまふべく又た内外の人人ゑも咎め蒙むるもの多かゝんと彼方此方と思ひやり先つ押ー隠し御内々ゑて太子の御行衛を尋ぬまゐゝせ首尾ゑく事を濟さんと思ひー事もんそかの嘆此方等夫婦い若宮の御誕生の當初ゑゞた傅の役を蒙むれば一と方なゝぬ心配お上へお嘆き掛まゝと隠せー物を入らざる出過とやく奏問ーたれべこそ辛苦を増そも其詐ゆゑよー此上い夫婦ゞ命を天神地祇ゑ捧けてありと太子のお行衛尋ね求め身の明白を立て申さんは容易けれど返そ〳〵も胴慾ない此方さんの御心底同じ御殿ゑ宮仕傍輩い七世の縁とかや箇程の契あるものを夫ゑ仇する邪慳の心人を祈らべ穴二つと世話ゑも云ふとまで知ゝそや人の疎相を披露ーて其身の出世をーたれべとて何時まで榮耀を保つべき天ゑい梵天地ゑい帝釋神佛か見通ーぞや爾云ふ心根なれべこそ誰あつて其詐の事を能く云ふものい一人もなく陰でい誰も名を呼べずアレ鬼婆アよッレあまのトやくよと綽名さるゝゑ氣い注ぬか其詐い包べど親里を聞けべ餘りゑ女中達を見さげた事も云れまい其の髪容色襠衣でい人も恐れて敬まへど开と仮親が宜き故ゞ何と此跡を云ふたゝぞお顔ゑ紅葉ゞ散りませう先が先あゝ此方も此方其の心ーて交際ますと思の丈い日來の遺恨さもつゝ〳〵言放てゞ耻と耻とも思いぬ南花女胸ゑ答へし詞の端も左あゝぬ樣ゑ空咲ひーて。イヤ此方さんとしゑ事ゞその樣あ事を此の私ゞおんを知つてをりませう私ゞ出世い私ゞの働ゝさ人を誹りて出世があらべ御遠慮おく誰ありと誹りて出世なされませィザ三人の姫達の詮議ゑ掛り若宮のお行衛を尋ね見ん其處放されよ優陀夷の内室御用の筋ゞ遲滯そる此忙かーい騒動の中ゞ優長ゝしい愚痴言ヤレ〳〵暇入ーたとゞと袖ふり拂ひ奥へ入る優陀夷の女房跡うち見やり。最早彼めゞ橋曇彌へ由あゝ事を言立たれゞ御前へ出るも憚かりあり是よりい太子のお行衛尋ね出して此方夫婦ゞ身の光明をべ立てべきが如何ゑも憎きアノ南花と思ひつめたる口惜涙思ゝゞ膝へとら〳〵〳〵折から奥より壁高く獅子ゞの參るゝ獅子ゞ參ると申戯ありふり囃ー立て

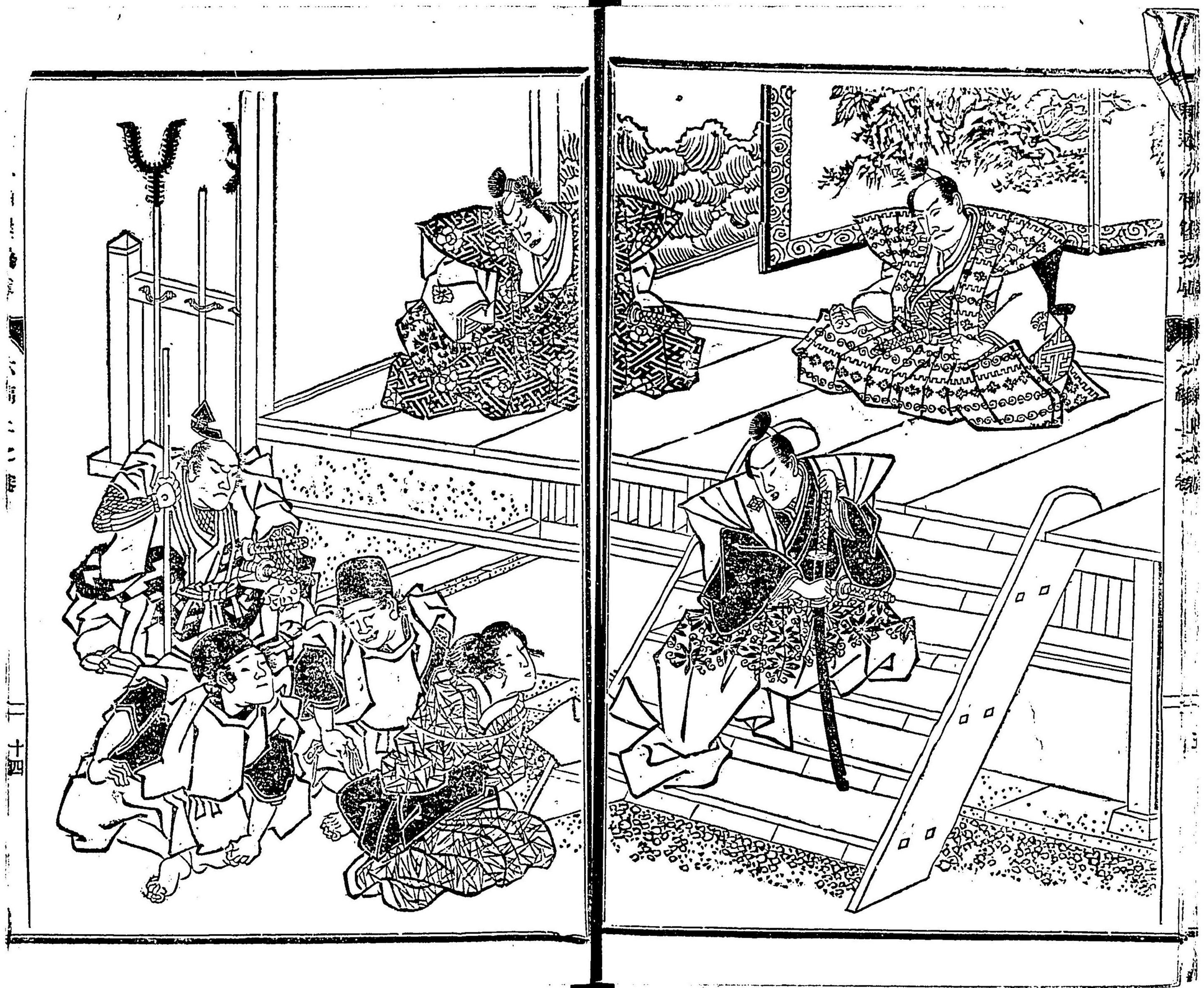
獅子の頭を打ち掉て此所へ出れゞ其跡より難陀太子い太鼓と持ち鉦々々と叩き立て俱ゑ浮れて來ゑまゐーが獅子い優陀夷の女房の涙ゑ暮れて居るをも厭いず爰を先途と舞ひ戯ふれ蒼蠅く寄をゞもどのーがり突除れゞ蹌踉と跚巡おから獅子を脱ぐを誰りと見れゞ悴の槃特奇機顔おる眉根を被め。

ヤァ母さんが何ドややふ嬉しさうゑ泣て居る私も一所ゑ泣ゞまそゆゑ難陀様もお泣やれと例の阿房ゑ女房い見るも苦ーき涙壁。ア、誰のと思へゞ槃特の偖も〳〵いつとても阿房を云ふゑい困りまそ夫をゞ止ゞて殿様事夫をーて御機嫌取りや仮ゑもうんお遊びをーて怪我ゞーをたふ何とそると止ゞて手先を打ちふれゞ最つと躍れと云ふとかと素より阿房の早呑込。チット合點天竺の獅子と猿とい お使者の役と跳りとねるを引つ捕へ母い歎ゞの壁震いせ。エー情おき我が子よのふ年い取れども其様お阿房ゆゑゑ父さんも母も苦勞を増すとんゞ不具な子程尚は可愛く芯の内でい思へども人ゑ肩身が狭まるぞや

今手を掉しゝ其遊戯止めせいと云ふ事ぞ偖々合點の惡い子や少しゝ親の云ふ事を耳へ止てくれよかしと大の男の顔ゑ顔當て泣つゝ搔口說ゞ樂特ゝ高笑ひ。ハヽヽヽヤヽこりや可笑ひハヽヽヽ、又た嬉しゝ事あるこの母さんぞの泣くとゝゝお此樣お可笑ゝ而白ゝ事ゝおいハヽヽヽと手を拍て打ち笑へゞ親ゝ腹を押へ齒を切ゑゞり身と震ゝせつゝ兩手を抑へ。エー又た何を云ふぞゝのふ云ふ事ゑ事を變て親の泣くを子ぞの見おがら面白ゝの可笑いのと手を拍ち囃して笑ふものぞ此の世の中ゑゑ又と一人あぶふとゝ思ゝれぬ何の報で此の樣お因果お胤を宿せしかと思へば夫婦ゞ先の世の罪ゝ如何おぞ深かりゝんとヨヽと計ゑ打ち嘆を難陀太子ゝ氣の毒ゞり。喃樂特爰ゝモウ面白くお い程ゑ是ゝら庭ゑ立出て馬事して遊ゞふと樂特を伴おひ立て樣側へとて出でゝさまへ心優陀夷れ女房も太子のお行衛早く尋ね奉まつらんと此も爰をゞ立出ける偖老女の南花女ゝ三人の姫達を詮議おさんと使者を立て一と間の内ゑ待つ程ゑ鹿野女瞿陀彌女ゝ速かに使者と共ゑ來りしかゝ南花女ゝヨゞと物やさーく。コレゝ〳〵お兩方ともお早ゝお來臨此れ耶輸多羅女ゝ何故遲ゝぞイヤ申ーお兩女さまお呼び申ーたゝ余の儀ゑあらぞ苟且ならぬ太子のお行衛お伽の役の其許方か知ふぬ事ゝあるまじゝれゞ有の儘ゑ御擧動をサヽ告げたまへ何とトやと問へゞ先つ鹿野女の方。成程仰らるゝ通り妾もお伽の役なれど耶輸多羅女の緩言ゑて過つる頃より御寐所のお泊をゞ省かれて酒の筵のお坐並さへれん他々ーき程おれゞ何とて太子のれ身の上御心中の一大事を明させたまふ筈ゝあし殊ゑ昨夜もいつもの如く彼の姫のお泊り番夫をおんゞや妾等お尋ねたまふゝ世話ゑ云ふ隣家を叩く門違ひた氣もじさまやと逃けれぞ瞿陀彌女も又た耐へずして。如何おも鹿野女どの〳〵云れし如く自身二人ゝ捨小舟獨りうき寐の楫枕ゝひおた事と耶輸多羅女が種々ゑ讒言して夜のお伽と省きつゝ我が物顔の勉め振人を見下ー傲慢て此程太子の御胤と宿せーおとゞ口ひろく披露をおせし氣儘者こんな事でも出來やうのと案じ暮ーゝゞ其の如く添寐ぞおゞら太子さまを亡おすやうお怪しんと是れゝ正しく耶輸多羅女ゝ俚諺ゑ云ふ外面如菩薩內心如夜叉の鬼娘て只た一と口ゑ太子樣を呑で除けたゑ違ひおひチー怖や恐ろーや妾ゝ毎晩非番ゆえ委ぞんとゝ耶輸多羅女へお尋ねあらば明白ゑ判り申そゝ知れてあると孫ての思ひ色ゑ出て口はしゑおく罵る如く肱めず臆せぞ逃べ終れゞ流石の南花も道理と思ひ二人の詮議事濟めゞ二女は日來の腹愈と倘ほ夫となく耶輸多羅女を樣さまゑ惡く言おし誹り散らして出てゆく途端ゑ入來る耶輸多羅女二女の姫ゝ時を得〳〵りと行き違ひさま尻目ゑ掛け嘲けり笑ひ當付る心の内ゝ氣味よけれど他の視る目ぞ淺まーき偖耶輸多

羅女の胸の内い身を裂るゝより尚ほ辛く惘然として坐よ直をい南花女いゝと尖々しく。如何よ姫聞きたまへおん身い太子のおん胤と宿し一方おらぬ御意よ入り夫ゆえ豫ての御挙動も能く存ドて居ふるゝ筈殊よ昨夜お泊りゆえ太子い何處へ御幸ありしゝ知ふぬといよもあるまじサ、有体よ申されよと問れて耶輸多羅女い豫て覺悟の上おから今更何と回答さへ泣く目を押へ居たまへバ南花女い尚は焦立ち。喃姫箇様よ尋ぬるも我ゞ私くしの事おらず豫て帝及び轎曇彌のお両方より優陀夷夫婦並よ三人の姫達へ最と嚴ーく太子の有様不審き事もわふバ都度〳〵よ告々知らせよと前以て仰せしとゝもあるものを此度の此の不休裁お側よ居ながふ太子様のおん挙動と云ふぬ顔とい何しよもの上を輕しむる其許ゞ計ふひサァ有様を打ち明し人の疑團晴ふされよと問ひ詰ふれて漸やく耶輸多羅女い涙を拂ひ怖々としく答ふるやう。成程おん胤までも宿しまゐらせ重き身と云ひ殊よ昨夜い泊番よも當ゞをバ人の疑ひ無理おふねど太子様の昨夜の御様子卑妾も深くい存ド侍らず其仔細いとや小夜更く子の刻頃と思ふころ太子密よ仰せるにい何か御覽ずる秘書あれバ部屋へ下りて呼ぶまでい必ふ走出て來るゝと余議なき仰默止しゞたく問毎〳〵よお伽もあれバ其儘部屋に下り夫より後の事共い如何ありしか夢さら走若ーてれよても疑かひ晴れずい如何ある責苦おゝ

咎めたとへ身と粉よ碎かれても外よえるべき様おけれバ寧その思ひ出自身を殺して帝の逆鱗や人の誹譏と止めてさべと云つゝ最と涙ふ暮を底とも判らず伏し鎮めバ腹に逸物ある南花打ち點頭て聲と低め。ホンよ夫程事を分ゞ眞實見ゆるおん身の詞知ふぬゞ情と思へども我ゞの一存よも計らいきねい爰よ暫ふく扣へられよ轎曇彌のおん前へ云々の由申ー上げおん指揮を伺ひ來んと奥と投ーてゞ入よける爾れバ又た耶輸多羅女の部屋よい局侍女共多聞下婢よ至るまで姫の御番に當りし夜太子の御行衛云れずなりて御殿の騒動夥さゞしく既よ主人い呼び出されまだお下りもおきまゝよ人傳に様子を聞い嚴しき罪よも逢ふべき噂案ドくらして居る處へ日來中よき傍輩ども我も〳〵と見舞よ來り耶輸多羅女の身と案ド共よ涙と流せるい親身の者とゞ思いれける斯る折から鹿野女の局と瞿陀彌の局打ち連れ立ち日來嫉みつ誹りつして角交際の中おれバ見舞ひてふよ入來り耶輸多羅女の局よ向ひ瞿陀彌の局い口尖ふせ。ホンよ聞い飛た事奉公する身い相互ひ一寸と見舞お參りました併し御端聞の耶輸多羅女果報負ごおされたかと云ふ傍より鹿野女れ局。ヲ、御前ゞ云ふ通り見さまで御出來おさる深い中ゆえ若様ゞおんぼ御逃おされうとてナニ御逃しおさきうか今も今とて御臺子でお炊女達の説しよい是い何でも耶輸多羅様い日來太子よ惚れ込で思ひ過て在る



ゆゑ私の旦那や瞿陀彌樣ゑ取られもそるかと悋氣の過て御臍の穴へ一と呑ゑのんでーまふさとてあらうおんぼ空じひ御腹ぐも丸で呑ずと少とい殘ー私ごの旦那も瞿陀彌樣も同じ御伽の中おれば一と口位い呑せたとて左のみ惜くもあるまいゑ一人で呑で堪能さゝんそい目尻の下つたお顏ゑ似せて助倍たふしひ御心と嘲々り誹れば瞿陀彌の局薄ん口唇差出し。そうとも〳〵どんゑ切おん責苦と受ても御心柄ゆゑ是非ゲない是がほんの獅子喰た報酬ておふて太子を喰た報酬私しの旦那の瞿陀彌樣い男嫌ひでさつゑりして御腹ゲ減てもひもトうおいなんともおいと十面作り日來謠ふて在るゆゑ此な時ゑい跡腹れ病む災難いでざんせぬと串戲まじりゑ嬲ふれても部屋の局い聞ぬ顏鹿野女の局い又た差ー出て。ホンゑ太子を喫た御部屋おら戸棚の中かふ足が出る此方の隅のふ腕かで出ゑおちらの隅うら骨ごの出ると歌ひ囃して入口の羽目戸叩いて笑ひつゝ尻を振り〳〵出く行く偖瞿陀彌の局も起ち上ま。ア、切角茶碗で呑で來ゑ酒の醉ゲ醒めさつゑ今日い如何おる吉日か日來の胸ゲ晴れましゑ興私ゲ旦那さまも御嬉しう在んせうと誹ま嫉むさ立ち歸る善さも惡きも各自れ主思おる心のら人を誹るい淺ましゝれど又た憎むゑも足らざるべー偖此日もいや入相ごろ南花女い入來りて泣き居る局ゑ打ち向ひ。耶輸多羅女の辨解立たず夫ゑ付き事濟むまでい片隅の明たる部屋へ移して暫らく幽閉ふれ御糺明おさるれば其許を始め附々の者對面いなりませぬぞ此義よく〳〵心得て皆々も此の部屋ゑ謹ーみあれと言渡し立歸る跡見送りて局始め此處ゑ集ひしものい皆お顏見合て是い如何おるれん事と一と方おらず案ト つゝその夜い泣て明しける去る程ゑ國中の善惡紛と政廳へ撿非違使共雜色ゑ一人の女ゑ繩を掛けさせ白洲間近く引き据て詞を正して訴たへけるい。我々い南御門の雜色ゑて候ふふゲ優陀夷とのゝ仰ゑ從かひ手分をおーて甲首乙首太子のた行衛尋ねしところゑ宮中の威乾門い常ゑ開かずの御門ゆゑ守護の役もおりーごの不思議と御門の扉開けて甲首乙首ゑ駒の足痕まだらお殘りて之あるゆゑ箇い不思議の手掛と直さまたん廐へ馳せまゐりて御馬を撿ため見たるゑ大子の常ゑ愛でたまふ金蹄の駒行方去れず舍人車匿を尋ぬれば是れ以つて行衛去れ也依て是おる車匿の女房ゑ由を問ゑ金蹄と車匿い今朝より見ゑ申さず余り不思議の事ゆゑゑ只ゲ今是より政廳へ訴たへ出んと存せーところと辨解そるを尙ゑ許さず如何ゑ不束おる女おりとて連れ添ふ夫の其行衛を去らぬと申そい僞りおらんと種々ゑ責問ども此女房夜前い不在ゑて今朝戻りーと由もなき辨解のみゑて絶て白狀たさねば斯の通り繩を掛け引立て參りて鋏ふふと云ば右將軍端近ゑ起ち出つゝ件の女房ゑ打ち對ひ物和らかゑ尋ね問ども金蹄と車匿の行

衛ハ夜前私くし不在ゆゑよ更々存じ申さぬあり偏よ縛ー先ゆるされよと願ふ詞の偽いりとも思へぬものから車匿の所在知るゝまでハ許しゞたーと縛ーめのまゝ拘留たかれぬ

釋迦八相倭文庫六編上之卷終